

イギリス便り

風 間 末起子

オレンジ色の夕暮れ

十一月×日

イギリスでは、街灯の明りがオレンジ色に灯ります。灰色がかった夕暮れ時は、不思議なロマンティックな空気を作り出しています。

家々の電灯も電球を使っているの、窓辺から漏れる光もオレンジ色。懐かしさが漂います。蛍光灯の白い光もいいけれど、オレンジ色の明りの下で生活したら、その優しさを忘れることは出来ないでしょう。

この頃は、夏時間が終わったせいもあって、日没は四時半頃、五時にはもう真暗です。

冬の旅、エジンバラ、インバネス、ネス湖へ

十二月×日

昨日、エジンバラに到着。ロンドンから特急で四時間半の旅。駅に降り立つと、さすがに北国。京都のとても寒い日、雪の降り出しそうな日の冷たさでした。そして小

雨模様。またしても私は雨女。カンタベリーを出る時は晴れていたのに。
着いた日はお昼の二時過ぎでしたので、



エジンバラ

まずはプリンセス通りをうろろ歩きしました。キルトやセーター類を売ってお店が本場に沢山あります。とにかく、ここは羊毛の本場ですから、セーターが、ゴミの山のようにつくねて売られています。

私が泊っているXXホテルからは、市内が一望できます。右手にはエジンバラ城、左手にはスコット記念塔、これらは、夜になるとライトに照らし出され、町全体が絵のように見えます。

エジンバラ城は、カッスルロックと呼ばれる百三十メートル余りの岩山の上に建つ古城。優美というより、敵しい様相で、却って心引かれます。街の建物は、どれもす・す・黒く、街全体を黒っぽい印象にしています。

丘と坂道の町。日本人の好きな町。坂の上からは、眼下に北の海と港が見えます。

十二月×日

今日は、朝から天気がとても良かったので、イギリス最北の都市インバネスに行くことにしました。エジンバラから、列車で

片道四時間もかかるのです。

発車から二時間ほどの間は、車窓からの眺めに雪は全く無く、晴天も続いています。たが、グランビアン山脈にかかる頃から、辺り一面雪景色。天気は山間に入れば入る程、悪くなり、途中、猛吹雪になってしまいました。こんな状態では、インバネスはどんな具合だろうと案じました。しかし、インバネスに近付くにつれて、雪雲は姿を消し、景色にも緑が多く見えてきたのでホッと一安心。

ハイランド地方の雪景色は、日本の風景に実によく似ていました。針葉樹が多く、山もあり(と言っても日本の山のように背が高くありませんが)、信州か、日本海側を旅しているような錯覚を覚えました。

駅に降り立つと、北の街の寂しさと冷たさが身に滲みました。青森に着いた時のような感じです。

インバネスは、エジンバラと比べたら、特に面白い町ではありませんが、でも、ネス川沿いに広がる町並は、こぢんまりしていて、なかなか趣きがあります。

お城や寺院を見てから、タクシーでネス

湖へ。インバネスは、ネス湖を観光する人達が拠点とする町なのです。ネス湖は、ネス川に続く全長四十キロもある細長い湖。



ネス湖とウルクハート城

今は冬で、観光客は全くいないので、湖は、ただただ静かな冬景色の佇まい。奥に行く程、雲が濃くなり、雨が降っています。どこまで行っても切りがないので、湖畔の廃墟ウルクハート城まで行って戻って来ました。悲しげな城の姿が帰途の間中、頭にちらちらしました。

列車で四時間もの長旅のせいか、車窓から雪を沢山見たせいとか、北国の寂しさがひどく身に伝え、早くエジンバラに戻って、と言うより、一刻も早くグランピアン山脈を越えたくて仕方ありません。カンタベリからエジンバラに着いた時は、ずいぶん北にやって来たものだと思いましたが、インバネスまで北上してみると、エジンバラさえが南の町に思え、ロンドンやカンタベリに至っては、南国も同然に見えます。今回の旅は、駆け足でしたが、北国の、そして冬の北国を垣間見ることができ、満足です。明日、この地を去りますが、早く帰りたい気持ちが半分、エジンバラを懐かしむ気持ちが半分、いい旅でした。

ヨークシャー、ハワースで

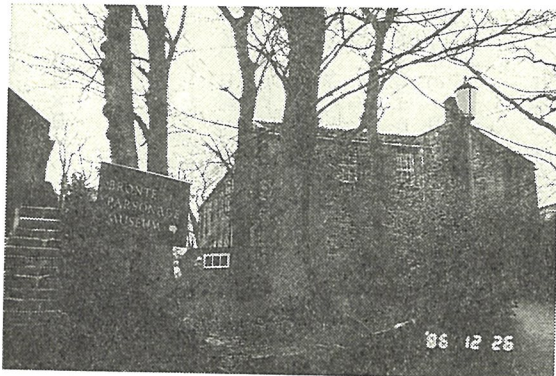
十二月×日

今日、ハワースに着きました。エミリー・ブロンテの『嵐が丘』ゆかりの地。ヨークからハワースまでの道程では、ヨークシャー特有のデイルズ(Dales)がどこまでも広がり、冬だというのに、芝草は緑色(イギリスの芝生は冬でもグリーンなのです)。しかし、ハワースに近付く辺り、奥に入り込むにつれ、景色は、ヒース草が群生する荒野に一変します。夏には、このヒース草は、紫色の小さな花を咲かせ、荒野一面が紫に染まって大変美しいそうです。でも今は、うら寂しい赤茶色のヒースの絨毯。

写真を撮るために車から降りると、風が強いこと、そして冷たいこと。気温はヨークの町より三、四度は低いのではないかしら。

こんな寒い、荒涼とした所に住んでいたら、『嵐が丘』のような小説が生まれてくるわけです。比較的、交通の便がよい現在ならともかく、十九世紀に、こんな村に住

んでいたエミリーやシャーロットはどんな思いで、どんな感受性をもって、毎日暮らしていたのでしょうか。ブロンテ姉妹は、父親が牧師で、父の赴任先がハワースだったので。ブロンテ記念館は、当時は牧師館だったようです。すぐ近くに教会があります。貧困と厳しい自然の中の生活、ここ



ブロンテ記念館

に来て、その一端を痛感させられました。
夏にもう一度、訪れてみたい。

カンタベリーで

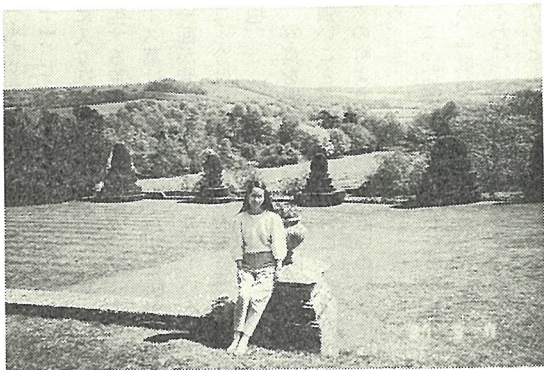
二月×日

気温は摂氏五、六度。例年にならない大寒波の後、雪もようやく溶けてくれました。イギリスの一月二月は、ミステイな日が多いのですが、実際に今日は、一日中、霧が町を覆っていました。外出すると、湿気で、髪の毛がしょぼしょぼして本当に気持ち悪いです。

三月×日

近頃、目に見えて日脚が延びてきました。イギリスの冬は太陽があつという間に沈んでしまします。だから、らっぱ水仙と共に始まる春には格別の美しさがあるので。同時に力強さも。木肌からは、緑色の新芽がまさに吹き出さんばかりです。

五月×日



カンタベリー近くのチラム邸の庭園

今日は快晴。素晴らしい天気です。隣向いの家の桜の花が、風に吹かれて、毎日、ひらひらと散っています。薄ピンク色の花びらが道や庭に散り敷かれて雪のようです。今頃は、どこの庭にも勿忘草のような小さな花が咲き乱れています。夏、緑色の季節は十月頃まで続きます。

夏の旅、「地の果て」地方へ

八月×日

昨日は、英国南西端コーンウォール州の突端にあるランズ・エンド(Land's End)に、ドーチェスターから車で四、五時間かけて、日帰りで行ってきました。ホテルに帰り着いたのは、夜中の一時頃でした。行きは、途中の村や町で度々交通渋滞にぶつかかり、予定していたより大幅に時間がかかってしまいました。ドーチェスターから約百五十マイルです。

今年の一月にも、ランズ・エンドを目指したのですが、大寒波到来の為、ランズ・エンドへの入口の町ベンザンスが雪で視界ゼロの状態となり、もうそれ以上先に進むことは出来ず、がっかりして帰って来たのです。だから、この土地には執着が強いわけです。

ランズ・エンドは、イギリス本土最南西端に位置し、文字通り、地の果てにありました。今のような時代にあつてさえ、「地の果て」だと実感できるのに、一昔前は一体どんな状態だったのだろうと思うと、

妙に寂しくなりました。ここに居たら、ロンドンには、何千マイルも先のように思えてきます。



Land's End

ここは、イギリスの名所なのでしよう。家族連れの観光客が多く、土産物屋は少々俗っぽい感じがしましたが、それでも、この土地は一見に値いする場所です。「地の果て」をしみじみ実感できるから。岩に碎ける波飛沫、物凄い強風、海を岩場から覗いていると飲み込まれてしまいそう。

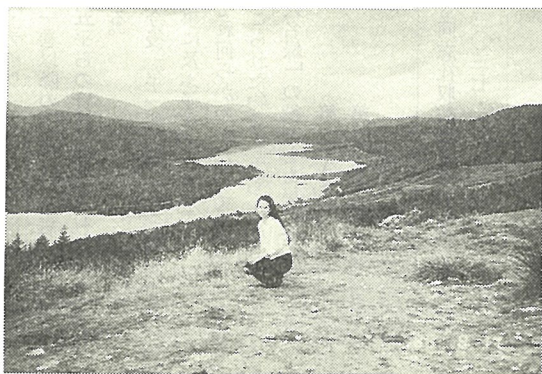
この地には、もう二度と来ることはないでしょう。そう思えるのです。余りにも遠いのです、心理的に。この地には、距離の域を越えた遠さを感じます。

再び北へ、スカイ島まで

八月×日

冬のハイランドの印象を携えたまま、夏のハイランド、スカイ島までやって来ました。

スカイ島は、敗残の王子ボニー・プリンス・チャリー（十八世紀スチュアート王朝の末裔）を勇敢にかくまったマクドナルド家のフロラ姫ゆかりの島。謎めいたところに引かれて、カイル・オブ・ロツハルシュから、黒いお椀のようなフェリーボー



ハイランド地方

トに乗って、島の玄関カイリーキンの町に上陸。船に乗っている時間は、ほんの十五分ほど。お椀の船の空き間からは、海水がジャージャー入り込んでいます。沈む可能性もありそうですが、誰も気にしていないようです。

観光ガイドブックの説明文を船上で読み終った頃、憧れのスカイ島に到着。ハイラ

ンド西部は、年中雨が降っていると言われているが、この日も、細い雨が間断なく降り続いていました。

どこまで走っても、薄茶色の山肌と、湖

のように見える海が山水画みたいに続くばかり。ガイドブックに書かれているような、モイル城壁の真下の絶壁も、その下の怒濤の風景など全く無かったけれど（あつ

たのは、小山にボンと立つ城跡と静かな海面）、スカイ島は、いつまでもロマンの島なのです、私には。

（女子大学専任講師）

追悼集

I （同志社社史資料室編・発行）

——同志社人物誌——明治十年代～明治四十年

追悼集

II （同志社社史資料室編・発行）

——同志社人物誌——明治四十一年～大正四年

同志社では明治二十年ころから、社長（総長）をはじめ役員、卒業生、教職員、学生生徒が永眠すると、その死亡記事とともに、追悼のことばや故人の略歴などを各学校の機関誌（たとえば『同志社文学』『同志社女学校期報』『同志社校友会会報』『同志社時報』など）に掲げて哀悼の意を表してきた。

その貴重な記事は、これまで古い機関誌の中に埋もれていて、極めて利用しがたい状態にあったが、社史資料室は昨年来、これらの記事の総てを探し出して書物にまとめる作業をおこなってきた。

第一巻には、新島襄、山崎為徳、山本寛馬、森田久万人、片

岡健吉らの他、男女各校の関係者約一〇〇名の記事が収録されている。

第二巻には、J・D・デイヴィス、元良勇次郎、市原盛宏らに関する記事の他、第一巻以降の年次に機関紙に掲載された新島襄、山本寛馬、松本五平らの資料も収録されており、約一〇名の記事を収めている。

この『追悼集』は、今後一年一冊のペースで刊行され、太平洋戦争中の戦没者の記事に及ぶ予定である。

『追悼集』は、それぞれ何らかのかたちで同志社史を彩り、また同志社史を築いてこられた物故者たちを記念するものであるとともに、「同志社人名録」の役割をも果たすであろう。

第一巻A5判 三五〇ページ

第二巻A5判 三八三ページ

頒価はともに一五〇〇円

『追悼集』は各巻とも同志社収益事業課で取扱っている
電話（〇七五）二五一—三〇三七・八